門出

要旨

男性が書く日記を女性も書いてみようと思い、帰京の旅の顚末を記すことにする。出立にあたって人々は別れを惜しむ。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P七四・3〈するなり。〉	男性が書く日記を女性である私も書いてみる。
第二	P七四・4〈それの年の〉～P七四・7〈書きつく。〉	某年十二月二十一日出立の顚末を日記の内容とする。
第三	P七四・8〈ある人〉～P七五・2〈夜更けぬ。〉	ある国司が任期を終えて、諸手続きを済ませて船に乗るはずの場所へ行く。見送りの人々と別れを惜しんでいるうちに夜が更けてしまった。
第四	P七五・3〈二十二日に〉～P七五・5〈あざれ合へり。〉	二十二日に、和泉の国まで旅の無事を祈る。藤原ときざねが送別の宴を開く。皆酔っぱらってふざけあった。
第五	P七五・6〈二十三日。〉～P七五・9〈しもあらず。〉	二十三日。八木のやすのりが送別の宴を開く。心ある者たちは気兼ねすることなくやって来た。
第六	P七五・10〈二十四日。〉～終わり	二十四日。講師が送別の宴においでになった。みなが酔って、足元がおぼつかなくなった。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①男（をとこ）も　す　なる　日記（にき）　と　いふ　もの　を、　女（をんな）　も

係助・同類　サ変・終　伝・体　格助・引用　八四・体　格助・対象　係助・同類

し　て　み　む　と　て　する　なり。

サ変・用　接助・単接　補動・マ上一・未　意・終　格助・引用　サ変・体　断・終

②それ　の　年（とし）　の　十二月（しはす）　の　二十日（はつか）あまり一日（ひとひ）　の　日（ひ）

代　格助・体修　格助・体修　格助・体修　格助・体修

の　戌（いぬ）　の　刻（とき）　に、　門出（かどで）　す。　③その　よし、　いささかに

格助・体修　格助・体修　格助・時間　サ変・終　代　格助・体修　形動ナリ・用

もの　に　書（か）きつく。

格助・場所　カ下二・終

④ある　人（ひと）、　県（あがた）　の　四年（よとせ）　五年（いつとせ）　果（は）て　て、　例（れい）　の　ことども

連　格助・体修　タ下二・用　接助・単接　格助・体修

みな　し終（を）へ　て、　解由（げゆ）　など　取（と）り　て、　住（す）む　館（たち）　より　出（い）で

副　八下二・用　接助・単接　副助・婉　ラ四・用　接助・単接　マ四・体　格助・起点　ダ下二・用

て、　船（ふね）　に　乗（の）る　べき　所（ところ）　へ　渡（わた）る。　⑤かれ　これ、　知（し）る　知（し）ら

接助・単接　格助・対象　ラ四・終　当・体　格助・方向　ラ四・終　代　代　ラ四・体　ラ四・未

ぬ、　送（おく）り　す。　⑥年（とし）ごろ　よく　くらべ　つる　人々（ひとびと）　なむ、

打・体　サ変・終　形ク・用　バ下二・用　完・体　係助・強意（係）

別（わか）れがたく　思（おも）ひ　て、　日（ひ）　しきりに、　とかく　し　つつ、

形ク・用　八四・用（流れ）　接助・単接　副　副　サ変・用（流れ）　接助・継続

ののしる　うち　に、　夜（よ）　更（ふ）け　ぬ。

ラ四・体（流れ）　格助・時間　カ下二・用　完・終

①男も書くという日記というものを、女（である私）も書いてみようと思って書くのである。

②某年の（陰暦）十二月二十一日の日の午後八時頃に、出発する。③その事の次第を、少しばかり物（紙）に書きつける。

④ある人が、（地方官としての）任国での四、五年（の任期）が終わって、慣例の諸事務を全てし終えて、（新任の国司から事務引継ぎ終了を証明する）解由状などを受け取って、住んでいる官舎から出て、船に乗ることになっている場所へ移る。⑤あの人この人、知っている人知らない人が、見送りをする。⑥長年の間親しく付き合っていた人々は、別れがたく思って、一日中、あれこれとしていて、大騒ぎするうちに、夜が更けてしまった。

⑦二十二日に、和泉の国までは（たどり着かせてほしい）と、無事であるように願をかける。⑧藤原のときざねが、（馬は使わない）船旅であるけれども、馬のはなむけ（送別の宴）をする。⑨身分の高い人も普通の人も低い人も、すっかり酔っぱらって、たいそう不思議なことに、（塩がきいていて「あざる《ものが腐る》」はずのない）海のほとりで、「あざれ（ふざけ）」合っている。

⑩二十三日。⑪八木のやすのりという人がいる。⑫この人は、国府において決して重用された者でもないようである。⑬そんな人物が、立派な様子で、餞別をする。⑭前国守の人柄であろうか、国人の心の常として、「今更（見送りに行っても仕方がない）」と言って現れないものであるが、真心のある者は、憚ることなくやって来た。⑮これは、物をもらったから褒めるわけではない。

⑯二十四日。⑰国分寺の住職が、餞別にお見えになった。⑱上も下も、あ

⑦二十二日に、和泉の国まで と、平らかに 願立つ。 ⑧藤原
格助・時間　副助・範囲　格助・引用　形動ナリ・用　タ下二・終

のときざね、船路 なれ ど、馬のはなむけ す。 ⑨上 中 下、
断・已　接助・逆確　サ変・終

酔ひ飽き て、いと あやしく、潮海 の ほとり にて、あざれ合へ
カ四・用　接助・単接　副　形シク用　格助・体修　格助・場所　八四・已

り。
存・終

⑩二十三日。⑪八木のやすのり と いふ 人 あり。 ⑫この 人、
格助・引用　八四・体　ラ変・終　代　格助・体修

国 に 必ずしも 言ひ 使ふ 者 に も あら ざ
格助・場所　副　八四・用　八四・体　断・用　係助・強意　ラ変・未　打・体（撥音＋無表記）

なり。 ⑬これ ぞ、たたはしき やう にて、馬のはなむけ し たる。
定・終　代　係助・強意（係）　形シク・体　格助・状態　サ変・用　完・体（結）

⑭守柄 に や あら む、国人 の 心 の 常 と
断・用　係助・疑問（係）　補動・ラ変・未　推・体（結）　格助・体修　格助・体修　格助・状態

して、「今 は。」 と て 見え ざ なる を、
サ変・用　接助・単接　係助・区別　格助・引用　接助・単接　ヤ下二・未　打・体（撥音＋無表記）　定・体　接助・逆接

心ある 者 は、恥ぢ ずに なむ 来 ける。 ⑮これ
ラ変・体　係助・区別　ダ上二・未　連語（打・用＋格助・状態）　係助・強意（係）　カ変・用　過・体（結）　代

は、物 に より て 褒むる に しも あら ず。
係助・区別　格助・対象　ラ四・用　接助・単接　マ下二・体　断・用　副助・強意　補動・ラ変・未　打・終

⑯二十四日。⑰講師、馬のはなむけ し に 出でませ り。
係助・区別　格助・対象　ラ四・用　接助・単接　マ下二・体　断・用　副助・強意　補動・ラ変・未　打・終

⑱ありとある　上下、童まで　酔ひしれて、一文字を　踏みて

連語（ラ変・用＋格助・並列＋ラ変・体）　副助・範囲　ラ下二・用　接助・単接　格助・対象　マ四・用　接助・単接

だに　知らぬ　者、しが　足は　十文字に

副助・類推　ラ四・未　打・体　代　係助・区別　格助・状態

ぞ　遊ぶ。

係助・強意（係）　バ四・体（結）

りとあらゆる身分の人々、子供までが酔いしれて、一という文字すら知らない者が、その足を十文字に踏んで遊ぶ。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶「土佐日記」と作者紀貫之について調べてきたことを発表する。知技(1)ア

❶新しい作品を扱う際には必ず文学史的事項について言及するべきで、ここでも生徒自身に調べさせることが望ましい。教科書の作品紹介が載せる以上の、作品の関連情報を調査させたい。

展開

学習活動のポイント

❶「門出」を音読する。思判表B(1)ア

❷重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウ

❸現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。思判表B(1)ア

❹作者がどのような立場で書いているか、確認する。思判表B(1)エ

❺諧謔表現を味わう。知技(1)エ　思判表B(1)イ

→「言葉と表現」1

❶有名作品の冒頭部分は暗唱させるとよい。「土佐日記」の冒頭詳細である必要はなく、同ジャンルに属する他作品として何があるか、それらとの先後関係はどうなっているか、程度でよい。紀貫之は最初の勅撰和歌集「古今和歌集」の撰者であり、仮名序の執筆者であったことが重要である。歌人であると同時に仮名散文の創始者でもあったという、日本語日本文学史上に占める重要な位置を理解させたい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

部分は助動詞「なり」の識別の目安ともなり、非常に有益である。また、「酔ひ」など、現代と著しく発音の異なる語には特に注意させる。「かれこれ、知る知らぬ」の対照法の部分はリズムに注意して読ませる。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷重要古語に関しては、接続や意味の違いに着目して紛らわしい語の識別ができるように指導する。また、十二支、月の異名など古典常識に関わる語に関しては、断片的、その場限りの知識でなく、体系的、網羅的に教えることが必要である。助動詞の「べし」は意味が多いので注意したい。「知る知らぬ」が準体法、

「なむ」の結びが流れている点など、確実に理解させたい。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸現代語訳は逐語訳を基本に正確な理解を徹底させたい。あいまいで感覚的な訳をしていては正確な読解力は身につかない。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中に指名し、部分の現代語訳や品詞分解を行わせることにより、確認する。

❹導入の調査と関連させて、作者が女性を筆者に仕立てるという虚構を採用していることを理解させる。教科書の脚注を参照して、作者自身を「ある人」と第三者的に扱っていることを、冒頭の女性仮託とも関連づけながら理解させる。

【評価】男性の作者があえて女性に仮託して日記を書こうとした意図について、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、発表などにより、確認する。

❺諧謔表現は、言葉の多義性を利用して意外性とおもしろみを生み出していることを理解させる。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・諧謔表現について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、口頭で説明させて、確認する。

《板書例》諧謔表現

陸路　馬のはなむけ（送別の宴）　⇔　海路　船旅　　矛盾＝諧謔

上中下―あざる（ふざける）　＝　あざる（腐る）　⇔　潮海（塩気は腐敗を防ぐ）　　掛詞＝諧謔　矛盾＝諧謔

一文字　をだに　知らぬ　者　⇔　しが足は　十文字　に　踏みて　遊ぶ　　矛盾＝諧謔

まとめと発展

学習活動のポイント

❶ 男性の日記と女性の日記のあり方の違いを考え、女性に仮託した意味を考える。知技⑵エオ　主態　→「言語活動」1

❷ 第三段・第四段を中心にまとめる。思判表B⑴　→「学習のポイント」1・2

❶「男の文章と女の文章」も参考にしながら、考えさせる。「男もすなる日記」がどういう特徴をもつものであったかを教えて、それとの対比で女性の日記がもちうる特徴を考えさせたい。日記に限らず、当時の一般として、男性は漢文、女性は仮名文という通念があったことや「女手」などの言葉の紹介を絡めたりしながら、理解させたい。男性漢文日記と女性仮名日記の特徴の違いを調べさせて、発表させたり、レポートなどにまとめさせてもよい。

【評価】時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・歴史的な文体の変化について、日記文学が、日記文学が単なる事実の記録にとどまらず、作者の思想や人々の心情を掘り下げることのできる文学形態であることに理解を深めているか、確認する。

・進んで日記文学の特徴や成立の背景を理解し、諧謔などの表現の工夫を味わい、学習課題に沿って女性に仮託した作者が日記でどのようなことを書こうとしたのか「男の文章と女の文章」を参考にして話し合おうとしているか、分析する。

❷地図を参照して海路の危険を理解させる。当時の国制を話して和泉の国が安全な畿内であることを理解させる。

❷見送る人々についてどのように考えているか、「願」を立てたことなどを参考にし、登場人物の心情を表す言葉を抜き出させ、整理させたうえで、意見交換をさせる。

【評価】出立にあたっての人々や作者の心情が読み取れているか、ペーパーテストにより、確認する。

発問例

●七四ページ

問　**「すなる」（2行目）と「するなり」（3行目）には、どのような違いがあるか。**

答　「すなる」は「するという、すると聞いている」の意で、「なる」は伝聞の助動詞・連体形。「するなり」は「するのである」の意で、「なり」は断定の助動詞・終止形。

補　品詞分解して文法的に説明できるようにする。「なり」の識別は重要。形容動詞の語尾や四段動詞「なる」と共にここで説明する。

問　**「男もすなる日記」（2行目）とはどのようなものか。**

答　公家日記。漢文で書かれた事実の記録。

問　**「女もしてみむ」（3行目）を現代語訳せよ。**

答　女（である私）も書いてみよう。

問　**「十二月（しはす）」（4行目）のような月の異名を一月から十二月まで言いなさい。**

答

一月	睦月（むつき）	七月	文月（ふみづき・ふづき）
二月	如月（きさらぎ）	八月	葉月（はづき）
三月	弥生（やよひ）	九月	長月（ながつき）
四月	卯月（うづき）	十月	神無月（かんなづき）
五月	皐月（さつき）	十一月	霜月（しもつき）

語句の研究

●七四ページ

2男もすなる　「男も書くという」。「も」を列挙とする解釈もあるが、萩谷朴氏によると、ここは「僕も行くから君も行け」の「僕も」の「も」のように、下の「女も」を誘い出すための強意の係助詞で、「女も」の「も」は列挙の係助詞。「なる」は伝聞の助動詞で終止形接続。男が日記を書くことを伝聞の形で述べているのは、筆者を女性に仮託しているため。

2日記　促音便無表記で「にき」とも表記された。平安時代には諸官庁の公務などを記録した公日記、儀式や行動を記録した私日記もあったが、いずれも男性が変体漢文で記したものが一般的だった。例えば、平安時代中期、右大臣であった藤原師輔（ふじわらのもろすけ）の日記「九暦（きゅうれき）」は、天暦元（九四七）年十一月について次のように記されている。「十八日、節会事、有子細、卅日、弓場始、主上先射給当的事」。女性のものとしては歌合の次第を書いた和文の歌合日記が数例残されているが、これとても記録としての性格が強い。

3女もしてみむとて　「女の私も書いてみようと思って」。「みる」は接続助詞「て」を伴って「試しに…する」の意を添える補助動詞。筆者を女性に仮託している。一般的には、仮名文字で書くための「女性仮託」と言われているが、勅撰集である「古今和歌集」の序文を仮名で書くという大胆なことをやってのけた貫之が、私的な日記を仮名で書くことにためらいがあったとは思えない。それよりは次のような効果を狙ったと思われる。①男性官人としての立場から自由になり、私的個人的立場から自由に執筆できる。②出来事の無味乾燥な記録とは異なり、人々の人情の動きに焦点を当てることができる。特に、亡くなった女の子への哀惜の念など悲嘆的感傷的な内容を、当事者として深く掘り下げることができる。③作者のそばにいた女性の立場を取ることで、貫之自身を第三者的に突き放して書くことができるようになる。④漢文ではなく和文を用いることができるため、作中に和歌をふんだんに取り込むことができる。さらに、地の文にも、和歌的技巧を持ち込むことができる。これらの効果に加え、作者が持っている漢文的な文章力、すなわち、対句的、対照的な構成法も加味されて、仮

六月	水無月	十二月	師走

問 **戌（5行目）とあるが、十二支を全て答えなさい。**

答 子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥。

問 **「そのよし」（6行目）の指す具体的な内容を答えよ。**

答 ある年の十二月に、ある人（作者）が京へ旅立つその旅全体の様子。

問 **「もの」（6行目）とは、具体的に何のことか。**

答 紙

問 ◉**「ある人」（8行目）とは、誰か。**

答 作者（紀貫之）のこと。

補 作者（紀貫之）は女性に仮託してこの文章を書いているので、自分のことではあるが、「ある人」と第三者的に表現している。「ある人」は国守とあり、貫之だと分かる。

問 **「乗るべき所」（11行目）とは、どのような意味か。**

答 「乗るはずの所、乗ることになっている所」など。「べき」は当然の助動詞。

問 **「かれこれ」「知る知らぬ」（七四・11～七五・1行目）は、それぞれどのような意味で、どのような対照になっているか。**

答 「かれこれ」は、「あの人この人」の意で遠名文のいっそうの発達が促されたと言われる。

3するなり　「書くのである」。「なり」は連体形接続のため断定の助動詞。ここまでの冒頭の一文が日記最末尾の「とまれかうまれ、疾く破りてむ。」と対応する。冒頭は、女性を装って日記を書く試みを宣言している文であるが、男性のような日記を書くつもりは当初よりなかったと考えられる。同様に末文は、「疾く破りてむ」とあるが、もとより作者にそのような気持ちはなかった。これも冒頭と同様偽装の言葉であり、新しい「日記文学」の誕生を裏返して述べた言葉であると考えられる。つまり、冒頭で試みの言葉を述べ、末尾でその成功を述べているという対応関係にあると言える。

4それの年　「ある年、某年」。貫之が任国土佐を出発したのは承平四（九三四）年だが、ぼかして言った。

5戌の刻　午後八時頃。一日二十四時間を十二等分し、午前零時から順に子、丑、寅…と十二支を当てて時刻の目安とした。「戌の刻」は午後七時頃から九時頃の二時間とも、午後八時からの二時間ともいう。後の「ののしるうちに、夜更けぬ」に対応。

5門出　「かどいで」からの変化。「出発」の意もあるが、ここは吉日に、あるいはよい方角に向けて出立するため、実際の旅立ちの前に場所を移ること。貫之の実際の出発は二十七日で、それまで送別の宴に明け暮れていた。

6そのよし　「そ」の指示内容を広く「京への旅全体」とも、限定した「門出」とも取れるが、この一文が日記末尾の「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。」と対応していると考えて、前者と見る。「よし」は「様子、事の次第」の意。

6もの　「紙」をぼかした表現。

8ある人　貫之自身を第三者的にぼかした表現。筆者に仮託されたのは貫之の身近にいた女性という設定。その女性の視点から貫之自身について述べている。

8県の四年五年　「県」は、ここでは地方官の任国。地方官の任期は通常四年で、貫之は延長八（九三〇）年正月に任命され、同年秋に現地に赴任しているので、このときまでに足掛け五年が経過している。後任の国守の着任が遅れたためである。よって、待ちかねた、ようやくの帰京であった。

9例のことども　国司交替の際に行われる恒

近の対照。「知る知らぬ」は、「知っている人知らない人」の意で親疎の対照。

●七五ページ

問 **◉「人々なむ」（1行目）の「なむ」の結びはどうなっているか。**

答 「思ひて」「しつつ」「ののしる」などの語に掛かっていき、そこで文が終止せず先へ続いているために、結びの流れが起こっている。

補 文末の「更けぬ」とは係り受けの関係になっていないことを確認させる。

問 **「ののしる」（2行目）とは、どのような意味か。**

答 大騒ぎする。

問 **「更けぬ」（2行目）を文法的に説明し、現代語訳しなさい。**

答 カ行下二段動詞「更く」の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の終止形。更けてしまった。

補 「なむ」を受けてはいないので、〈未然形＋打消の助動詞「ず」の連体形〉ではない。

問 **「船路なれど、馬のはなむけす。」（3〜4行目）という言い方のおかしさ（洒落・ユーモア）を説明せよ。**

答 馬に乗らない船旅であるのに、旅立つ目的地の方向に馬の鼻を向けて、旅人の無事を祈願する古代の風習である「馬のはなむけ」を言い立て、わざと言葉の上での矛盾

例の事務引き継ぎのこと。

9解由 解由状。奈良・平安時代に、官人の交替の際、後任者が前任者との交替事務の完了を認めて交付する文書。前任者は一定期日内にこれを太政官に提出しなければならず、これがなければ次の官職につくことができなかった重要書類。

10住む館 国司の官舎。現在の高知県南国市比江にあった。

11船に乗るべき所 高知市大津。当時は古浦戸湾に面した良港だったが、現在は陸地になっている。十二月二十七日条に「大津より浦戸を指して漕ぎ出づ。」とある。「べき」は当然の助動詞。

11渡る ある地点（時点）から他へ移動することで、ここは「行く、移る」の意。

11かれこれ 漢語「彼此」の訳語と言われる。ここは「あの人この人、誰彼」の意。

●七五ページ

1知る知らぬ 「知る」「知らぬ」は共に準体言で、下に「人」などを補って解釈する。次の「送りす」の主語。

1年ごろ 「年来、数年の間」の意で、ここは貫之の土佐国守在任期間を指す。同類の表現に「月ごろ」「日ごろ」がある。

1くらべつる 「くらぶ」は「親しく付き合う」の意。「源氏物語」に、「付き合いにくい」の意と解される「くらべぐるし」の語がある。

1人々なむ 主語として後の「思ふ」「す」「ののしる」に掛かるが、いずれも、そこで文が終止しないために係り結びが行われず、結びの流れが起こっている。

1別れがたく 「がたし」は「かたし」が動詞の連用形について、濁音化した接尾語。「…しにくい、なかなか…ない」の意。

2日しきりに 一日中。

2とかく 「あれこれ」の意の副詞。副詞「と」＋副詞「かく」で一語化したもの。

2ののしる 「大騒ぎする」。現代語との語義の違いに注意。

3二十二日 写本の原表記が漢字表記であることを考慮して音読みしておくが、「はつかあまりふつか」と和訓で読むことも可能。

3和泉の国までと、平らかに 「和泉の国」は現在の大阪府南部。「まで」の後に「たどり着かせてほしい」などを補って解釈する。「と」は引用の格助詞。「平らかに」は「（旅が）平穏無事であるように」とする説と「心穏やかに」とする説がある。前者な

をおもしろがっている。

問　**「上中下」（4行目）とは、どのような意味か。**

答　身分の高い人・普通の人・低い人の意。

問　**「いとあやしく、潮海のほとりにて、あざれ合へり。」（3〜4行目）には二通りの解釈が考えられる。それぞれを説明せよ。**

答　①まことに見苦しく、海のほとりで酔っぱらってふざけ合っている。②まことに不思議なことに、塩のきいた海のほとりで、腐るはずがないのに腐っている。

問　**「平らかに願立つ。」（3行目）とあるが、作者はどのようなことを心配していたと思われるか。**

答　海賊の横行や風雨、波浪が強く、海が荒れること。航海の安全を祈願しているのである。

問　**「潮海のほとりにて、あざれ合へり。」（4行目）の表現上のおもしろさを説明せよ。**

答　「あざる」は「ふざける」と「（魚肉などが）腐る」の二通りの意味がある。和歌の技法である掛詞と同様の考え方で、人々が「海辺でふざけている」さまを、「腐るはずのない所で腐っている」と言い立て、「潮海」と「あざる（腐る）」の言葉の上での矛盾を楽しんでいる。

問　◉**「守柄にやあらむ」（7行目）は、どこ**らば、通常の語順としては「和泉の国まで平らかにと」とあるべきところを、風浪や海賊の危険がなくなる内海の畿内国である和泉の国まで来れば一安心という意識から、和泉の国を強調的に先に取り上げたことになる。一月三十日条に「今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず。」とあるのに対応しているとして前者を採った。

3願立つ　神仏に願をかける。ここの「立つ」は他動詞で、タ行下二段動詞。

3藤原のときざね　未詳。呼び捨てにされているところから、身分の低い人物で、貫之の土佐国府での下僚かと言われる。

3船路なれど、馬のはなむけす　「馬のはなむけ」は元来、旅立ちにあたり乗馬の鼻を行く方向へ向けて無事を祈る習俗で、後には送別のもてなしやその品を意味するようになった。ここも後者の意だが、馬に乗らない船旅なのに「馬のはなむけ」をするという矛盾を楽しむ諧謔表現になっている。

4上中下　「身分の高い人も普通の人も低い人も」の意で、結局「そこにいる全ての人」の意となる。

4酔ひ飽きて　「飽く」は、ここでは「満足する、すっかり…する」の意。

4あやしく　「不思議なことに」。次の「潮海の…あざれ合へり。」の形容。塩のきいた海と「あざる（腐る）」の矛盾を不思議がる表現。酔っぱらった様子の「見苦しく」の意をも表すとする説もある。

4潮海のほとりにて、あざれ合へり　「あざる」には「ふざける」「腐る」の両義がある。ここは「酔っぱらってふざける」の意に「腐る」の意を掛けて、塩のきいた海のほとりなのに腐っている、と矛盾を楽しむ諧謔表現。歌人としての作者の言葉に対する感性が生かされた文章となっている。

4　「合ふ」は「（複数の人が）一緒に…する」の意を添える補助動詞。

6八木のやすのり　伝未詳。土佐の豪族か。

6国　国司の役所。国府。「竹取物語」に「国に告げたれども、国の司まうでとぶらふにも」という例がある。

7ざなり　「ざるなり」の撥音便「ざんなり」の「ん」を表記しない形。

7守柄　国守の人柄。ここでは前国守の作者自身について言う。

10講師　国分寺の住職。国内の僧尼を管掌し、仏の教えを講じる。

10出でませり　おいでになった。「出でます」

に掛かっているか。

答 「来ける」

補 挿入句である。「来ける」の連用修飾句となっている。

問 「今は。」（8行目）の下に省略されているのは、どのようなことか。

答 もう用はない。

補 都へ帰っていく役人に対する土地の人の態度である。

問 「一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。」（11行目）はどのようなところがおもしろいのか。

答 「一」の文字さえも読めない者たちが、酔っぱらって足元がおぼつかず、足で「一」より難しい「十」の文字を書いているように見えるところ。

は動詞「出づ」に尊敬の補助動詞「ます」が付いて一語化したもの。

11 一文字をだに知らぬ　一という文字すら知らないとする誇張表現。「紫式部日記」にも、「一といふ文字をだに書きわたしはべらず」という卑下表現が見られる。

11 しが足は　その足は。「し」は代名詞、「が」は格助詞。

鑑賞

いわゆる女性仮託の宣言といわれる冒頭の一文を含む一節である。第三者の女性を筆者に擬しているわけだが、作者とは別人格の女性を立ててその視点から記述するというやり方が作中に一貫して採用されているとは必ずしも言えない。「男もすなる日記」が記録性の強い日次（ひなみ）の漢文日記を指すとすれば、それを「女もしてみむとてするなり」という文言は、表面的には男性漢文日記の女性版を作ろうという意味であり、すなわち、女性仮託の主眼は、仮名文による日々の記録を記そうとするところにあったということになりそうである。この作品は任国土佐からの帰京の旅を記したものであるが、その五十五日間が一日も欠かされることなく記されているところに、その記録性は如実に現れている。この序言が作品末尾の「とまれかうまれ、疾く破りてむ。」と呼応していることは一目瞭然であり、そこではせっかく書いた日記を破棄しようと述べられている。これは、記録を目指して書かれたはずなのに、思いがけずも亡児悲傷をはじめとする人情の掘り下げが行われたり、歌論めいた表現が随所に挟み込まれたりと、客観的な記録性を逸脱したことに対する自己批判の文言であると言えよう。

しかし、もちろんこの跋文を正直に受け取ることはできない。作品は破棄されることなく、転写を経て現存しているからである。つまりこれは韜晦の言辞であるが、記録性を脱した仮名文学作品を作り出したことを逆説的に揚言していることになる。とすれば、冒頭の「男もすなる日記」を「してみむ」という文言も、実は初めから裏切られるために書き付けられたポーズのようなものであったと言えよう。記録の体裁をとり、それを目指すと言いながら、なし崩し的に逸脱していくのが「土佐日記」の執筆態度であった。

作者紀貫之は「古今和歌集」の撰者として、歌壇の指導的地位にあった人物である。いわゆる古今調の特徴の一つとして、理知的、言葉遊びによる技巧性などが指摘されるが、言葉遊びに基づく諧謔表現が随所にちりばめられていることは、この作者の作品としてまことに似つかわしいことであると言える。